



今日もどこかの
バーで、明日の
自動車産業のあ
り方をめぐって
ドラマがくり広
げられる。



裏通りにある小さな酒場で あのシーンの回想が始まる

外に雨が降っている

名も知らないプレーヤーが奏でるジャズと、雨音が作りだすリズムにひたりながら、熟練のマスターがつくるカクテルに身を任せる。必要がない限り互いにほとんど口をきかない。だからこくまれに、ささやくようにこぼれてくるひと言が、ひどく印象深いものになる。

「あの時も雨が降っていたな。」

きわめてありきたりな言葉のひとつひとつが、あざやかな意味をもっ

カウンターのかたわらでささやかれた 若くありたいトヨタという企業の悩み

て思い起こされる——そんな話を聞いた。

ドアが開いてほとんど同時にふたり組が入ってきた。大きな音がしたがどちらが開けたかはわからない。ただ室内からでも、ムタなほど幅が広いと、キザを絵に描いたようなストライプというふたつのネクタイが、折り重なるように近付いてくるのがわかった。

カウンターの後、8人も座ればいっぱいになってしまう店内には、先客が3人いたが、だれひとり関心をもつ者はいなかった。

「いらっしやいませ」。マスターが声をかけると、濡れて重くなったスーツの上着をハンガーにかけてから、ふたつのネクタイは店のいばん奥へと進んできた。すでに飲んでいるのか足元をふらつかせ、壁にぶつかりそうになった末、並んでカウンターのほうにどつかと腰をかけた。

「何をおつくりしましょうか。」
「甘ったるいのはい。ろ（と）にかく酔っぱらえるやつをくれ。幅広ネクタイの方が吐くように言う。ストライプのネクタイがたしなめるあがつていた。

かのように口をはさむ。
「それはちよつと乱暴ですね。酔うならマッカラ25年ものあたりがいいでしょう。ありますか。」
「さいます、とマスターが答え終わらないうちに、胃に入れりゃ同じだろうと幅広は口の中で言う。
ふたりの話は単調でまとまりがなかった。AからCへ進んではBへ戻り、突然Zへ飛んではまたAに返った。気にする客はだれもない。ふたりも周囲を気にかける様子はなく、BGMと調和もしていなかった。ただそこだけがふたりの空間であるかのように、きみような均衡ができ

「そういう面もある。だが、それだけでもない。そんなことだけではないんだ……」。幅広はこう言いつて、アルコール分57度のラフロイグをあおった。
ジャズの音が止む。それがキツカケになったかのように、幅広とストライプは勘定をすませると、やはり足元をふらつかせながら店を出た。外には雨が降っていた。

旧イメージを打破できるか やがて明らかになるだろう

トヨタが、日本を代表するサーキットのひとつ富士スピードウェイ（FISCQ、静岡県）を買い取ることについて、三菱地所と合意したのは10月の終わりごろだ。

同サーキットの株式のうち約67%をトヨタが握り、経営者も派遣するという文字どおりの買収だ。価格は増資分と合わせ約60億円といわれている。

2002年に自動車レースの最高峰フォーミュラワン（F1）への参戦を目指すトヨタとしては、とうぜんFISCQでの開催をもくろんでいることだろう。
念願だった国内販売でのシェアが4割を超えたいま、トヨタがあえてこうした行動に出た理由については、さまざまな要素がある。そのなかにも、とかく中高年に傾きがちな企業イメージから脱して、若者にアピールしたいという希望があるのは、ほぼ確実と言える。
「あれはヨーロッパで販売量を増やすための宣伝効果を狙っているんでしょう。別にホンダに対抗しようというだけじゃなくて。」

編集部 篠原隆史

